

ローマ都市オスティアの住宅¹

ジャネット・ディレーン（オックスフォード大学）

20世紀はじめの数十年間に行われた体系的な発掘の当初から、住宅建築の解明は主たる関心事の一つであった（図1）。ヴィトルヴィウスの記述をなぞるようにぴったりと符合するポンペイのアトリウム住宅とは異なり、後2世紀のまったく新しいハウジングを示していたからである。それらはマルティアリスやユウェナリスが風刺詩の中に描いた複数階の賃貸集合住宅や従うべき建築基準に近いというだけでなく、20世紀当時のローマの住宅建築にそっくりであった。この発見がもたらした知的熱狂は発掘責任者のグイド・カルツァ²が記した多くの論文にも感じ取ることができる。そして1940年代にはオスティアのインストラの復元画には当時の建築のテイストが強く反映される一方で、逆にオスティアの建築のインパクトは当時の建築デザインにも影響した³。やがて発掘が進むと第二の未知のハウジングタイプが現れてきた、すなわち古代末期の裕福なドムスハウスである。そこでは惜しげも無く大理石装飾が使われ、円柱付の応接室や泉水付の中庭もあり、おそらく当時の首都ローマの状況は不明なものの余暇を楽しむためにそこからやって来た人々、その中にはキリスト教徒の新しい富裕層が含まれるかもしれないと発掘した考古学者は考えたのである⁴。1920年代以降、帝政期の建物遺構の下層が発掘され、共和制末期から帝政初期のアトリウム住宅の痕跡が発見されているものの近年にいたってもインストラほどの熱狂的な興味を喚起することもなく⁵、未だ研究成果は限られている⁶。

ドイツ考古学研究所による地下探査プロジェクト⁷によって、共和制末期住宅の痕跡や大規模に増築されたドムス、そして後1世紀後半の郊外別荘が発見され、ローマは除くとしても、当時の多彩なハウジングに関する資料、ただ宮殿のみが欠けているけれども、帝国のどこよりも豊富に提供していることは間違いない。本稿では、最近の発見を考慮しながら共和制末期から後5世紀までの古代ローマ都市オスティアにおけるハウジングの総合的な俯瞰を試みたい。

1. 富裕層におけるハウジング

古代ローマのハウジングにおいて、ポンペイを代表する一家族用のドムスと帝政期半ばの複数家族用賃貸集合住宅インストラの二分法で考えるのは安易に過ぎるように思われる。すでにメグスが随分昔に指摘したように⁸、もしオスティアにおいて後1世紀半ばの居住

用の宿泊施設までさかのぼることができるなら、ヴェスヴィウス火山の噴火によって保存されたポンペイのほぼ同時代の住宅とさほど違いはないだろう。後2世紀以前の層位に至る発掘は限られているが、20世紀前半に集中する発掘例では、その都市の末期にはまったく見られない数多くのアトリウムやアトリウム-ペリスタイル型へ増改築された例が数多く発見されており、すべて共和制末期あるいは帝政期のごく初めにその起源をもつ⁹。同時代の家々は旧カストゥルムの内側、とくに海に向かった西側へのデクマヌスの延伸部に沿った地区で確認される。また、デラ・フォーチェ通りの起点からカルドの南への延伸部の旧ラウレンティアーナ門までの地区、そしてカストゥルム内部の東部分である(図2)。これらのほとんどが正式に発掘報告されていないために、年代の特定は難しいが、すべてではないが大多数が後1世紀、なかでも多くはアウグストゥス帝時代かユリウス-クラウディウス朝のはじめと判定できる¹⁰。

これらのうち最小規模の部類に入る例としてはカーサ・バジリカーレ (I.ix.1, 図3)の

下層から見つかった3軒がある。平面を見る限りペリスタイルはなく、メググスはこうしたアトリウム・ハウスについて「富裕層に限られない」と推測した¹¹。そこで装飾の技量と規模という点から、同様の左右対称の平面をもつポンペイを参考に¹²、それにはおよばないけれどもオスティアでは典型例であるそのアトリウムと装飾について、より詳しく比較してみたい。最終段階において、3軒のうち最大であるハウスAはタブリヌムの左右に2つのトリクリニウム、大理石製の井戸口をもつ巨大なインプルヴィウム、いくつかの部屋には複雑な幾何学紋様をもつモザイクが備えられている。他の2軒は保存状態が良くないけれども、ハウスBのタブリヌムはパロンビーノとよばれる白色大理石のオプス・セクタイルによる床をもち、ハウスCの最も保存状況のよい部屋は、普通ならタブリヌムと特定されるかもしれないが実際にはトリクリニウムであったと思われるが、植物をモチーフとした複雑な幾何学紋様をもち、トリクリニウムに特徴的な制す臥台(カウチ)を置くためのU字形の床装飾が施されている。ペリスタイルが欠けているものの、パヴォリーニが表現したような「中流住宅」の装飾とは言い難いレベルである¹³。

オスティアで最も大きなアトリウム-ペリスタイル型の住宅はポンペイで最も有名な住宅群¹⁴のいくつかと似たような規模である。もし、ジオーベ・フルミナトーレの家

(IV.vi.3, 図2)が後に「ビザンチン風呂場」¹⁵の一部となった大きなペリスタイルを含んでいたとすれば、その規模は2000㎡を超えていたことになり、ポンペイの「ヴェッティの家」や「メレアグロの家」(ともに約1140㎡)よりも大きく、「迷宮の家」(約2320㎡)よりもやや小さい。これらの家の装飾のレベルも、現時点で確認できる遺構を見る限り、決して見劣りしない。これは、最近発掘された「ブクラーニの家」における前1世紀と思われる装飾にも見られ、後のアウグストゥス帝時代でも「ペリスタイルの家」では、考古学者もパレティーノの丘の邸宅¹⁶に匹敵するレベルの壁画と認めている。これらの家々はオスティアでも上流階級に属し、おそらくマリウスによる最初の略奪が起こり、

海賊の侵入を許した前1世紀の危機的な状況下で、オスティアから参事会員や行政官を輩出した家系であったかもしれない。それは要塞時代の壁外に残るアウグストゥス帝期はじめの墳墓2例に見られる軍船の図像から判断可能で、そこにはアクティウムの海戦で終止符が打たれたローマの内戦が描かれている¹⁷。

これらの裕福な住宅群は遅くともユリウス・クラウディウス朝の末期までに建設されたもので、後1世紀後半には状況が変化しはじめる。デクマヌス通りの西部分に面する

「III.ii.1-2の家」は、やがて大きなフロニカ（縮絨工房）¹⁸に取って代われ、V.ii.8¹⁹では、おそらくアトリウムを持たない新たな住宅形式（後の「フォルトゥーナ・アンノナリアの家」）が生まれた。未発掘地区内のこれらの二つの大規模住宅はドイツ隊による地下探査により発見され、アトリウムを持たない中庭式であることが確認されている（図4）²⁰。「ヌオタトーレの浴場」（図4a）東側の住宅は、セクタイル式の床と大理石張りの壁体で飾られ、大まかに4300㎡の面積はオスティア現在知られている住宅の中でも最も大きく、ポンペイ最大の住宅「ファウヌスの家」を上回っている。共和制時代の城壁のすぐ外側南面、海岸に沿ってトラヤヌス帝時代の「海の門の浴場」のさらに外にもともと郊外別荘であった最大かつ壮麗な装飾を誇る邸宅が存在する。大まかに9500㎡を占有するこの住宅は1世紀の第3四半期に建設された。ローマあるいはナポリ湾に似つかわしいこの住宅は、ヘルクラネウムの「パピルス荘」に匹敵する広さのメインブロックに加えて長大な庭園部をもっており、ラウレンティーナ海岸に沿って広がっていく別荘建築群の起点でもある²¹。

これが帝政中期のオスティアの支配者階級がどこに住んでいたか？という悩ましい問題に答える最良の解答かもしれない。2世紀全体を通じ3世紀後半まで、共和制期やアウグストゥス帝時代風のアトリウム型住宅のいくつかは商業建築に取って代わられた。「ジオーヴェ・フルミナトーレの家」（IV.iv.3）のように一部は大規模住宅として残ったが、3世紀には発掘される最大規模の住宅でさえペリスタイルを失い²²、共和制後期の「アプレイオの家」は2世紀半ばに大幅に改築され、3世紀末にはさらに大規模に改修される²³。最新の発掘によれば「ペリスタイルの家」は少なくともセヴェルス帝時代まで住宅として機能し続け、「スクオラ・デル・トライアーノ」と呼ばれる建物に占拠されたわけではなかった²⁴。もし「ペリスタイルの家」が紀元148年のコンスルであり、一時はオスティアの庇護者であったカイウス・ファビウス・アグリッピヌスのオスティアでの住居だというゼーヴィヤボーヘーレンの説が正しければ、帝政中期におけるオスティア上流階級に属する人々の住宅の実態を知る一種の基準となりうが、1700㎡という規模は比較的小ぶりにも思える²⁵。地下探査では住宅の所有者は知るべくもなく、ながらくオスティアにおいて元老院や騎士クラスであった一族の住宅を丹念に観察する他なく、オスティアの上級政務官や庇護者たちのなかに見つかりそうである。例えばエグリリ・プラリアニと呼ばれる地方の役職はその好例でユリウス・クラウディウス朝後期やフラヴィウス朝初期までおそらく将来の元老院議員への出発点であった²⁶。

同時期、とくに後2世紀の後半において高級住宅の別の類型が登場した、それは住居と店舗が併設された多層階のインストラと呼ばれる建物で、帝政期のオスティアを特徴付ける。このタイプのなかで最も目立つのは、少数であるが高層建築物の一部でありながら占有中庭に有する住居である。例えば、「ミューズの家」(III.iX.22)、「ジョーベとガニメデの家」(I.iv.2)²⁷、高級住宅へと改築された「ディアナの家」(I.iii.3-4) (図5)である²⁸。面積はそれぞれ750, 540 m²、最小の「ディアナの家」でも480 m²である。すべてポンペイにおいてウォレス・ハドリルが抽出した上位4分の1グループの高級住宅の下限にあたるが²⁹、この数字には住宅内部からアクセス可能な上階の広大な面積は参入されていない。また、「ジョーベとガニメデの家」の後に付加された中級クラスの集合住宅(I.iv.3-4)を共有されている大きな中庭も含まれていない。ポンペイの住宅の中で匹敵するものを、全体面積という点だけであげるとすれば、「イウリオ・ポリビオの家」(約740 m²)、「トレビオ・ヴァレンテの家」, 「悲劇詩人の家」(ともに約550 m²)があてはまる。しかし、独立住宅(ドムス)という点ではさらに比較しておかなければならない。「ミューズの家」の最も広い二つの接客室と「ジョーベとガニメデの家」のそれをみても(それぞれ前者が約49m²と56m²、後者が63m²)、約45m²のポンペイの「迷宮の家」の著名なコリント式のおエクス(oecus)よりも大きい。つまり、オスティアの住宅はポンペイの同じ階層の住宅と比べて、少なくとも地上階では数は少ないが大きな部屋を有する傾向があり、そこでは空間の使い方が大きく異なっていた可能性が指摘できる。部屋の広さに家族の大きさや構成、あるいは社会との関わり方を読み取れるほど十分な証拠があるわけではないけれども影響をみることはできるかもしれない。おそらく、これらの住宅の上階がその鍵となるが、上階の空間構成を復元するには残念ながら未だ十分な証拠がない。これらの住宅のうち、二例については、空間表現や社会分化のための基本的な構成要素をいくつか推定できる。玄関はピラスターや彩色レンガによるペディメントで縁取られ、視覚的なインパクトを狙って注意深く配置されている。「ジョーヴェとガニメデのインストラ」のそれは中央広場の顔である新しい公共神殿(カピトリウム)の裏手に直接つながる道路沿いに配され、「ミューズのインストラ」は西側に延びるデクマヌス・マキムスにほぼ並行し、幹線道路の一つであるアウリーギ通りから一步入った幅広の道路に面しており、それは「カーサ・ア・ジャルディーノ」とよばれる複合建築のメイン・エントランス前の広場につながっている³⁰。この二つの家はともに一対の部屋による連結ユニット(奥のクビクルムとそこに自然採光を供給するためだけに設けられた控間)をもち、奥にはプライベートとして機能するドミヌス(主人の間)とよばれるエリアと想定できる³¹。「ミューズのインストラ」では連結ユニットのレイアウトはさらに念入りに計画され、中庭に面するアーケードにつながる小さな集会室の様な部屋からも出入りできるようになっている。この集会室にいたる扉や「ジョーヴェとガニメデのインストラ」のこのエリアの控間に至る扉は玄関から見える位置に配されており、謁見の間のような公的な接客室、あるいはアトリウム型住宅におけるタブリヌムと同種の空間が想定される。

残されている部分だけをみても、非常に高品質な装飾がさらにステイタスの高さを示している。「ミューズのインストラ」では細密で複雑なパターンをもつ白黒モザイク床は壁面装飾とともにハドリアヌス帝期にさかのぼり、この家の名前のもととなったアポロとミューズをあしらった建築的な図柄と大広間の一つから見つかった神話を描いた壁面は同様の図柄をもち、ともにポンペイにおける装飾様式を想起させる³²。「ジョーヴェとガニメデのインストラ」のモザイクは、むしろよりシンプルながらも同様の形式をもつが、壁面装飾は「ミューズのインストラ」より質の劣る装飾に2世紀後半に上塗りしたものである³³。一方メインとなる接客室に残る壁面装飾は神話を描いたものとしては唯一残る完全な例であり、もしかすると、もとの装飾も同様に「ミューズの家」に似た形式だったかもしれない。これらのインストラ型のドムス住宅の第三の例は、「ディアナの家」の下層から近年発見された。もとの平面は一部しか明らかになっていないが、確認された装飾は多くは上流階級を物語るものである³⁴。背部にある大きな部屋の大理石版を使ったオプス・セクタイルという技法の床は食事用の長椅子を置くための伝統的なデザインが施されており、この部屋が主たる接客および食事に饗されたことを示している。今一度、ポンペイの「ラビリンスの家」のオエクスと同じ規模であることが思い起こされる。2世紀のオスティアでさらに驚かされることはもともとモザイクが施されていた中庭が、中央泉水の設置、大理石製の舗石による縁取り、大理石と色ガラスを巧みに組み合わせたモザイクパネルなど非常に短期間に回収されている点である。この大理石は例外的な質を示しており、チボリのハドリアヌス帝の別荘に見られる皇帝たちの文化の強い影響を背景にもつ³⁵。

つまり、これら三例は明確に豪華な都市住宅として分類することができ、それらはいわばアトリウムの「モダン」バージョンであった。所有者はおそらく周辺に荘園を所有するオスティアのエリート階級、あるいは、商業や遠方との交易で財を成した人々であった。

「主人の間」ともよべるこの分類形式は例えばイタリア半島の初期の住宅よりも北アフリカのドムスにより広範にみられる³⁶。もしかすると、銘文記録に登場する商業活動に関わるかなりの数のアフリカ系の人々とともに本形式が移入されたと考えられるかもしれない³⁷。「ミューズのインストラ」の規模がオスティア内では「ペリスタイルのドムス」の居住区（ペリスタイルを除く）とほぼ同じ、「フォルトゥーナ・アンノナリアのドムス」よりも大きいことに注意しておく必要はある。後者は中庭の周りにレンガ造の回廊というよりは、石造の列柱廊をもつけれども、そのドムスは接客用の空間をほとんど持たず、「インストラ」の形式にくらべてタベルナエなどに大きな空間を割り当てる。潜在的な相応の規模の都市住宅の購入あるいは賃貸を考えている層には、双方ともその候補となり得ただろう。もしかすると単なる個人的な好みや都合あるいはロケーションに基づいて選ばれたのかもしれない。さらに私が思うに、次の占有者の社会的あるいは経済的な状況など思い描く必要すらなかったのかもしれない。

ここまで簡単ではあるが上流階級のハウジングをみてきたが、多様な形式があり得るとともに、より小規模な住宅や簡単ではないが様々な時代性に応じてカテゴリー分けされた住

居が議論されていない。例えば、おそらく2世紀に分類される「トリグリニアーニのドムス」(III.i.4)³⁸の中心を成す部分、大半がハドリアヌス帝からアントニウス帝に属する「フォーラム浴場」裏手のIV.ii.5の家³⁹、そして後に「カウポーナ・デル・パヴォーネ」(IV.ii.6)⁴⁰となるセヴェルス帝期の住宅などである。約250から380㎡に分布する地上部分と内部に中庭があり、一方で少なくとも後の二例は不可欠な要素として上階を有し、見事な装飾をもつ⁴¹。再度記すが、これらはすべてウォレスーハドリルのポンペイにおける住宅類型の第三象限、つまり高級な装飾がみられる小さなアトリウムをもつ形式に含まれる。未発掘地域にはより多くのこの類型が眠っているだろうし、地下探査ではこうした住宅の不規則な平面形式を検出するには十分な情報は得られない。単なるドムスとしては分類できないような例が大量にドムスとして認識され、ときには「メディアヌム」型集合住宅と呼ばれる住居が見過ごされていることさえある。これらについては多くが語られており以下ではそちらに目を向けたい。

2. いわゆる「メディアヌム」型集合住宅

オスティアには、おおよそ100ほど共通の平面をもつ集合住宅があるが、そのうち約40は「メディアヌム」集合住宅と分類できる⁴²。この名前をつけたグスタフ・ヘルマンセンは法的史料を扱う中で、複数の占有者がいるインストラの上階にある共有室から道路に向かって投げ捨てられるゴミに対する法的責任の問題を論じた⁴³。彼はメディアヌムを長形の中央広間であり、そこから全ての居室にアクセスできたと考え、オスティアの集合住宅の一つの独立した形式を特徴づける平面形式とした。ある点ではこの解釈にも問題がある、例えば少なくとも平屋の集合住宅がすべてヘルマンセンの例にあてはまるわけではない。しかし、その名前が広く使用され、アトリウム型や中庭型とは異なる類型を与えることで、オスティアの住宅をより総括的に理解することができるのは間違いない⁴⁴。

「メディアヌム」型の平面は、例えば「バッコ・ファンチウッロのインストラ」(Liv.3 , 図8)が典型的で一つあるいは多くの場合二つ、異なる規模(AおよびB)の大きな接客室を細長い矩形の「メディアヌム」(M)の両端にもつ。すべての部屋は街路、中庭、あるいは庭園に面するガラス張りの窓を通じて採光されるが、二つあるいはそれ以上の個室群、すなわちクビクラ(C)、多くは乏しい採光であるものの、「メディアヌム」の反対方向に開口部をもつ。場合によっては、AあるいはB室の奥にさらに部屋が配され(ここではBとbが、同時期のドムスでいうところの主人の間を形作る)、多くはトイレと台所が併設され、廊下によって主たる居住空間からは切り離されている。最も大きな部屋には一体として機能するかなり広い上階があり、最大の接客・生活空間である室群Aの多くは二倍の天井高があった。実際このタイプの集合住宅は短冊状ユニットのタベルナを一列

(例：II.vi.3 および6, V.iii, 3, 図9)あるいは二列(例：カーサ・ア・ジャルディーノ複合建築, III.ix)内包するには都合がよかった。一方，地上に広がる残された遺構群がかつて共通の上階平面を有していたとは考えがたい。ローマのカピトリウムの丘の裾野に広がる実例ではインストラの主階(ピアノ・ノビレ)の上部⁴⁵，あるいはオスティアのIII.x.1の2階として復元できる⁴⁶。しかしながら，居住形式になにか区別があるとしたら，決定的なのは強い自然光を採り入れるための窓ガラスの使用であり，アトリウムやペリスタイル型の住宅では中庭が光を供給していたので，早くとも窓ガラスは完全に普及しはじめるのは後1世紀半ばである。

よく知られた「メディアヌム」型集合住宅のなかで，もっともシンプルかつコンパクトでしかも早い例はカセッテ・ティーポ(III.xii-xiii)であり，後100年頃に年代判定できる(図10)。二戸の平屋の集合住宅が二つのブロックを形成するだけのこの住宅には，街路から入る階段の痕跡を残し，それぞれの集合住宅に個別に，すくなくとも一つ，おそらくそれ以上，2あるいは3階の上階があった。保存状態が良くなく1.5m程度の高さまでしか残っていないために確実なことはいえないものの，それぞれの住宅が内部に一体的な上階を有していたようには見えない。標準的なレイアウトである接客・生活空間のルームA,BおよびメディアヌムMと独立したルームCはすべて個別の台所と二部屋型のトイレをもつ(図中K/L)。また，すべての部屋に壁画とモザイク床の痕跡があり⁴⁷，たった二棟の建物へのアクセスを確保するためだけでもかかわらず，建物間の道路には玄武岩の敷石が施されている。この余分な投資はその不動産の所有者(達)によって強行されたとしたか思えない。

「カセッテ・ティーポ」に関して，まだ説明できないが興味をそそる見方の一つに「標準住宅」という近代的なレッテルがある程度の信憑性をもって語られるが，実際にこれらの平面がどの程度のヴァリエーションを持ちうるのかという点である。すべての居住者は大まかに同じような広さ(約118～127㎡，階段下のスペースがどのように使われたにもよるが)を占有しているが，すべて一つの「メディアヌム」型平面をもつが，西方の一对(III. x iii)だけはお互いに線対称となっている。残りの二つは異なる平面をもち，III.xii.1はルームBをもたないが，その代わりにメディアヌムの端にクビクラと非常に小さい台所・トイレユニットをもつ。対照的にIII.xii.2は台所・トイレユニットの脇に玄関廊があり，おそらく主たる入口はメディアヌムというよりも最も大きいルームAにつながっている。その構造を詳細にみると，この平面上の違いは当初からと考えられる。例えばヴァリエーションが買い手の要求に応じて造られたのか，もしそうであれば，それぞれの棟は2人のオーナーをもつことになる。あるいは所有者あるいは開発者が見込まれる借り手の要求をくみ取ったのか，少し他とは違う特別な平面を好むような賃貸市場を見越したのか。別の言葉を使えば，ある程度のデザイン性が認められる以上，一つの定型に拠りながらも特別なヴァリエーションを設けたのは，おそらくオーナーの意向だけでなく，借り手の要

望があったことは考えられる。

とはいえオスティアにおける集合住宅に関する議論の中で「カセット・ティーポ」は、料理や食事のための共有空間「メディアヌム」を各階にもつ多層の賃貸ユニットであり、一般的には下層階級のハウジングと考えられてきた。また同様の平面を持つ類例、例えば「カーセ・ア・ジャルディーノ」と比べて、時代がやや古く規模も小さいとはいえ、壁がやや薄く構築技術もやや粗雑なこと、また外部階段が完全に木造であるなど、その造りにも一因がある。これらは確かに「メディアヌム」型平面の完成形をもつより小規模な集合住宅群に属する。がしかし、ポンペイの「アリアーナ・ポッリアーナのインストラ」にある賃貸用の3軒のドムスよりも、それでも大きいのである。もしピルソンの見解⁴⁸を受け入れるとすれば、例えば VI.xv.9 のようなポンペイでもっとも小さいアトリウムハウス群よりも確かに大きい。加えて、全室をつなぐ中央部に向かって主室を開け放ちとする共通の空間構成は、アトリウムハウスの空間構成と本質的には同一のもので、とくに側室を持たない、あるいは片側だけにもつアトリウムハウスによく当てはまる⁴⁹。もっと大きな違いは一例を除きすべてが、長い玄関廊下を介して外部と内部を遮断することなく、直接前面街路とつながっている点で「サルタティオ」のようなフォーマルな接客空間をもつ形式としてはデザインされていないと考えて良い。同時に小型のアトリウムハウスが容易に比較対象となりうることも考えなければならない。ここでは、「カセット・ティーポ」を大量生産品として住宅というよりは、贅沢ではないがポンペイにも類例がみられる相応の戸建住宅として扱ってきた。議論を難しくしているのは、これが今もオスティアに残る完成された「メディアヌム」型集合住宅の最初の事例である点だが、同時に「カセット・ティーポ」は全く新しいタイプの住居形式の比較的初期の発展段階を示しているのかもしれない⁵⁰。

もし、「カセット・ティーポ」がオスティアの集合住宅における「メディアヌム」型の初期段階を示しているとすれば、「カーセ・ア・ジャルディーノ」コンプレックスのいくつか（III.ix.3, 4, 6, 8, 10, 12-21 に加えて後に「ディオスクーリのドムス」に組み込まれた二つ、10図）は成熟期を例示していると考えて良い⁵¹。地上階に17戸を有し、当然上階にも同様の住宅群があると考えられるこの集合住宅は広大なオープンスペースに囲まれ、まるで現代のコンドミニアムのように周囲の雑踏から隔離され、限られた内部へのエントランスは必要なときにはいつでも閉じることができる。より保存状態がよい事例の一つに「黄色い壁面のインストラ」（III.ix.12）があり、「メディアヌム」（M）の両端に接客室AとBをもつスタンダードなパターンを有し、中庭に向かって大きく開かれた窓の間は美しく装飾され、「メディアヌム」の内側の暗い方に二つのクビクルムをもつ。この集合住宅のキッチンとトイレは階段の下に位置しており、窮屈だけれどもほどよく装飾が施されている、またこの「メディアヌム」は形態としては他に比べて正方形に近く、A室につながる付属室は通常はB室に付くことが多い。これはどう見ても地上階面積300㎡を超える集合住宅の一部で上階をあわせると570㎡まで広がる可能性があり、この複合体の中では最大

の「メディアヌム」型集合住宅の一つである。残された装飾すべてを眺めてみても、より重要な部屋には複雑な幾何学パターンのフローラル文様が施され、次のフェイズでは多色模様も見られる。

何とか地上階の完全な平面がわかる14の集合住宅のなかで、4棟が2ブロックに校正されている中央にある8例（III.ix.13-20）は大変似通っている。一方でカセッテ・ティーポのように全体の形式は共通で、ある種のマイナーチェンジが施されている例もあるが、ほとんどは、部屋の広さや数などの細かいレイアウトにおいて異なっている。例えば二つから四つまでに異なるクビクルムの数がある。また、あるものはキッチン・トイレのために独立した広い部屋をもっているのに対して、あるものは階段下のスペースでやりくりをしている、あるいは上階にもつものもあるかもしれない⁵²。2軒（III.ix.10 および4）は完全にタベルナであり、双方とも背後に主たる接客室Aにつながる扉をもつ。一方で、つい最近発見された「イエロドゥーレの家」では、メディアヌムの両端にB室が位置し、広い中央接客室は列柱による広い間口をメディアヌムにもつ。あらためてこの多様性には驚かされるが、今は知ることのできない家主に対する思惑だけで、この豊かな展開を説明できるとは思えない⁵³。建設材料や技術を詳細に分析してみると、明らかにこの建物は同時の建設なのである。つまりこれらのヴァリエーションは建築家達のオリジナルデザインなのだ。実際にIII.ix.3や4はモジュラーデザインが確認でき、はじめにクビクルムを一つ増設したために長めのメディアヌムが必要になっている。ことなるサイズで構成されるユニットの中に近代の集合住宅のデザインを垣間見るようである⁵⁴。

地上に広がるメディアヌム型の集合住宅は外部階段を介して上階に建設された戸別の集合住宅とともに一体としてデザインされた複合建築物である。実際の典型的なメディアヌム型集合住宅はI.iv.3（図8）や4に見られ、「ジョーヴェとガニメデのインストラ」と一体の構造で中央の大きな中庭を共有している。対照的に、II.iii.3や4、あるいはV.iii.3や4は大小の異なる大きさのユニットが結合したものである。V.iii.3と4の場合（図11）、そのインストラは6つのタベルナを包含し、二つの集合住宅はもともとは内部でつながっていた。同じ家族の一員であるか、あるいは同じ召使い集団を養っていたかであろう。これらすべての場合においてメディアヌム型集合住宅への玄関口は、より高級なホレアや贅沢なドムスと同じようにペディメントを戴く付柱によってはっきり区別されている⁵⁵。

II.iii.3-4の場合、両脇にピラスターを備える共用廊下のエントランスから地上階の集合住宅や外部階段にアプローチできる。これは少なくともいくつかの集合住宅が計画されていたことが前提かつ実際に存在していたことを示している。このような多くの装飾された登り口が、ラウレンティーナ通りやエパガシアーナのホレア通りなど主要道路に見いだされるものの、上階の集合住宅の実際は完全に失われうかがい知れない。一つの例外がメディアヌム型の集合住宅であり、飾られた登り口は持たないけれども、上階を知る手がかりにはなる。「描かれたヴォールトのインストラ」（III.v.1，図12）は、接客空間あるいはリビ

ングを最奥の角部にそなえ、特別に大きな階段室を内包する集合住宅で、建物の両側から採光できる中廊下式の平面をもつ。狭いと扉をもつ少なくとも4つ部屋がクビクルムとして機能し、改築されやや大きくなっている部屋のところにはもともと第5のクビクルムがあったかもしれない。そして、もっとも重要な点は、この大きな集合住宅には専用の水道付キッチンとトイレ、バス・ルームが備わっていたことである。バス・ルームからの水は床の傾きに沿って流れトイレから排水されていた。上階と地上階を含めた異質な中廊下式平面のために、この建物はしばしばホテルと解釈されてきたが、パッカーがすでに指摘したように⁵⁶、そう考えなければならない決定的な証拠はない。逆に、約187㎡の総床面積はポンペイでは小さめのアトリウム・ハウスと同じくらいでしかない。ある特別な平面をもつけれども、この集合住宅は大規模なメディアヌム・コンプレックスの上階、とくに「カーサ・ア・ジャルディーノ」の中央ブロックの上階が、小さな住戸に分化される必要性はなく、地上階と同じ平面の繰り返しであり、同じ水回り空間を備えていたことを示している。最近スティーブンスは水道供給がすくなくとも3階まで可能であったことを考えると、水回り空間の設置について4階まで可能で、トイレについては少なくとも3階までは可能であったことを示している⁵⁷。

これまでの考察から、オスティアには少なからずオリジナルの形式をもった相当な数の居住区があり、経済的にも裕福な顧客に長期間の賃貸物件として供給されていたはずである。これしめす直接の証拠は未だ不足しているが、都市活動や商行為を支えた多くの同業者たちのなかのファーブリー・ティグナリ（大工）やフローネス（クリーニング業者）、あるいはメンソーレス・フルメンタリ（小麦販売業者）のような富裕層が顧客であったかもしれない。その階層の最上位の多くには、多くの点で小規模のドムスに比肩しうる大きくて設備の整った、そして豪華な集合住宅が供給され、それらの小型の部類でも下層とは決して分類できない規模であった。

3 . 人口の残りはどこに住んでいたのか？

様々な形式のドムスや高級集合住宅が広範囲に認められるものの、人口の残りの部分がどこに住んでいたのかを確定するのはより困難かもしれない。この都市の構造、とくに主要道路沿いでは、住居や建築よりも商業によって決定づけられているのは見ての通りである（図13）⁵⁸。1室あるいは2室構成のタベルナの多くは基本的には販売や生産ためのユニットであり、すでに発掘された地区だけで800以上のユニットが発見されている。さらに地下探査によってさらに多数が確認されている⁵⁹。また、ある建物の地上階はバック・トゥ・バック（背中合わせ）の2列のタベルナが占有することもあれば、それ以外の形式では、とくに公共浴場、高層住宅、商業建築、あるいは高級住宅でさえ、その道路側正面をタベルナに占有されるのは、もっと普通であった。これらのタベルナの多くでは、直接つながっている背後の部屋や中二階、あるいは1室構成でも単に後ろの一部分が被雇

用者のための生活空間にも使われていた。これらが単なる商用地であった他に生活空間として実際に使われていたことは、ときに見つかる独立のトイレが示している。例えば「ジョーベとガニメデのインストラ」の角に立地する大きなタベルナでは、住宅からこの区画が分離された後に内部階段の下にトイレが造られている。

下層階級の居住区への入口が街路に面するタベルナの中に挟み込まれていることもあり、これらの多くは上階へ至る階段室である。これらの集合住宅での暮らしは保存状態のよい地上階の集合住宅が推し量るしかないが、実際にはこの都市にはそれをはるかに超える多数の上階での暮らしがあった。階段室しか残っていないが、その多くは地上階部分全体が商業用として使われているインストラに属している。例えば、I.viii.6-10 を形成している7ユニットでそれぞれ2から5つのタベルナを地上階に有している(図14)。「ディアナの家」(I.iii.3-4, 図15)の両アントニウス期には2階に珍しい室配置が見られ、この階から上階へ至る階段室の痕跡は少なくとも1つ、おそらく2つであったと考えられる。その配置から多くの上階の集合住宅が小さく、おそらくは2から4室構成であったと思われる。ただ、このインストラの同じ階にはそれとはかなり異なる配置が見られる、狭く貧相な小部屋が廊下に一列に連なり、おそらく共有されたリビングが隅に1室だけある(図15の6)。このタイプの住居はあまり議論の対象とはなっておらず、「エパガシアーナのホレア」(I.viii.3)⁶⁰の上部やローマのカピトリウムの丘の裾にあるインストラの3階⁶¹にその例があり、考えられているよりも一般的なレイアウトであったと思われる。その建物は間違いなく上階での居住のためにデザインされたものであり、さらに外部からの階段によって、地上階の共用トイレを使うこともできたし、内部の2つの階段を使って貯水槽から水を得ることもできたし、あるいは内部のトイレも使えたかもしれない。その建物は地上階に類似の2軒の小さな集合住宅をもち、8つのタベルナはそれぞれ内部に中二階、そのうち2つは背後に部屋をもつ。つまり、これらの住宅を見る限り、街区がもつインフラへのアクセスが不便ではあるが、タベルナ・ユニットによって供給された居住は生活空間という点では、居住専用ではあるが小型の集合住宅に決して劣るものではなかった。

地上階の室配置のすべてが簡単に解釈できるわけではなく、まったく同じ平面形式がオステティアのどこかに存在するわけでもない。ただ、「ディアナの家」はいわゆる「下層」と呼ばれる階層のハウジングを推し量るのに有用なのである。一方、これらのすべての住宅は賃貸であり、2から4室の集合住宅が月極、あるいは年間契約でそれなりに立派な、しかし不動産を持たない程度に裕福ではない集団に貸し与えられた。日貸しや週貸しが似合いそうな住居、すなわち下宿屋やペンシーネのような形式もあり、とくにオステティアのような港町では移動人口や季節労働者が考えられる。しかし直接の証拠はなく、一つの小さな集合住宅に何人の人が住んでいたのかもわからない。さらにその小さな集合住宅が、小さな核家族という我々が考えそうな集団よりは、実際には何人もの他人によってシェアされていたのかもしれないが、その数は判らない。ただ、ローマ法が示唆するところによれば、それはかなり一般的であったようである⁶²。

相当に入念に計画された平面をもっていたり、より高いステイタスを狙ったような小規模の集合住宅は街全体を通じて発掘されている。ゲーリングは400近い数を確認し、そのうち100以上に分類可能な要素を見いだしている⁶³。III.xvi.5やIII.xi.1(図16)のように、いくつかは、主要道路に面して陣取るタベルナが使い残したスペースを塗りつぶすように広がり、完全に不定型であるものの、必ずタベルナの一つに直接の出入口を備えている。他は規則的な街区に対となつて建設されていて、例えば、III.xvi.2(図16)のように、同一平面をもちながら、上階の集合住宅を画す中央の階段室を軸にして平面が鏡像のような対象関係になっている。この特徴的なケースは内部に上階の存在を示す階段室や個別の集合住宅棟につながる外部階段の存在にもかかわらず、地上階の内壁は薄く木枠のパーティションのようである。内壁は現在完全に失われているがIII.i.12-13に見られる例も同様であろう。他にモジュール配置は、一つの大きな集合住宅のなかに似通った平面の大小の住戸とエクストラ・ルームをもつ例が確認できる。例えば、I.xiv.9のインストラ(図16)のように「ホレア・エパガシアーナ通り」に面する375㎡の長方形の街区である。それぞれ上階の独立した集合住宅につながる階段室と91㎡と52㎡の2戸の地上階の集合住宅につながる廊下の間口は記念建造物のように飾られている。これらの住戸は後付けではあるがニッチの噴水を共有し、その水は水道橋から直接鉛管で供給されている。小さな方の住戸はタベルナの一つから直接の出入口をもち、他のタベルナは廊下を通じて出入りでき、そこで商売をしている者は誰でも水の供給を受けることができるし、あるいは大きな方の集合住宅に住むこともできた。それぞれの廊下の端にある主室Aは広い間口をもち、廊下を通じてクビクルムとして機能するようデザインされた一つあるいは二つの個室Cと廊下を介して小さい扉で出入りできた⁶⁴。ここまで見てくれば「カセット・ティーポ」型への進化はもう少しであり、ゲーリングはこれらの多くの小型集合住宅のデザインが見せるモジュールシステムには通底するコンセプトがあり、これがまさにメディアヌム型の究極の姿だという⁶⁵。帝政期のオスティアにおいては、規模にかかわらず多くの例に見いだされる不可欠な要素としてのタベルナは商業空間と居住空間を直接つなぐ機能が強調される場所だったのである。

したがって後2世紀のオスティアは、タベルナの背後や上部の1室構成から、規模だけでなく洗練された度合いも異なる住戸を抱える集合住宅、多様な平面をもつ大規模で豪華な都市住宅、そして数は少ないが巨大なスケールのドムスまで、非常に多様な居住形態を示す可能性がある。メディアヌム型集合住宅にフォーカスするというある意味近代的な説明を加えようとしても、この街がもつハウジングのストックの少数しか範疇に入っていないのである。むしろ、この都市の街路空間は商業的な要素で構成されているが、居住空間と切りなはして考えることは大きな間違いとなる。多く、おそらくほとんどの商業空間は居住空間としても機能した。また家族の営みなど庶民的な空間の多くはその上階に見つかる。これらの構造から唯一独立しているのはホレアだけであろう。この構造は上階に居住区へ

つながる外部階段をもち、タベルナを併設するインストラにおいては不変である。ここにオスティアの人口のほとんどが暮らしていたと考えるのが妥当であり、その人口には永住した人々や移動しながら一時的に居を構えた多くの人々、夏の航海時には多くの商売人やそれにかかわる商活動に携わった多くの人々、あるいはローマへ向かうため宿泊する人々、そして船を待つ乗組員や乗客も加わっただろう。もっとも豊かで恵まれたオスティアの人々の住宅や、街全体の活動を支え、おそらくローマへの物資を一時的に保管したる倉庫群を別とすれば、庶民生活の空間と商業空間はここではほとんど区別が付かないのである。

4 . 古代末期の人口とハウジング

後3世紀の政治的に混乱のなかで、後4世紀後半にはオスティアはローマの貴族たちの余生を過ごす海浜別荘地としてとらえられ、徐々に危機的な衰退にむしばまれていった。したがってローマ末期オスティアの費用を投じて飾られたエリート住宅は、しばしば生活の反映という点で後2世紀の多層階集合住宅が示すものとは違ったかたちでとらえられてきた。このグループの住宅に関する主な研究は依然としてベカッティによる他ないが、彼が確認した13例に新しくいくつかの例を加えることができる⁶⁶。そのなかの「ティグリニアのドムス」(III.i.4)はかつてキリスト教のバジリカと考えられていた⁶⁷、またIV.iv.7のドムスはガイドバルディ⁶⁸によって研究されたが「アウグスターリの学校」とも呼ばれ⁶⁹、ラードはもっともらしくドムスの最終形に違いないと断定した。はじめはアウグスターレスと結びつけられた彫刻群は学校のような施設を飾るよりも、石膏窯の存在と関連しているものの、確かにそれが古代末期のドムスを飾っていた姿を容易に想起させる⁷⁰。「トライアヌスの学校」(IV.v.15)も同様に誤解されているのかもしれない。多くの上流階級のドムスと並列するこの建物は、ボールマンが記したように同業者組合の寄合所としては珍しいとさえいえる⁷¹。しかしこの建物が何に関わるものかを決定的に示すような証拠が全くない⁷²。むしろ、後5世紀まで使われたことは明確なので、この地で二度の改築の末にたどり着いた一つのドムスのかたちととらえるべきだろう⁷³。

しかしながら、これも一つの見方でしかない。パヴォリーニが20年以上も前に指摘したように、すでに存在していた多数のエリート階級住宅は古代末期にも使われ続け、これらは最後の改築によって単にアップデートされただけなのだ⁷⁴。加えて、現在知られている例だけでなく、より多くの事例を詳しく調べてみると、明らかに後2、3世紀(あるいはこれ以上さかのぼらない)に起源をもつ割合が増えてゆき、後4世紀に生まれた新しい住宅形式はほとんどない。例外は二つだけで、「アモーレとプシケのドムス」やおそらく「ニンフェオのドムス」だけが後4世紀後半から5世紀はじめに起源をもつ。後4世紀末から5世紀はじめの建設や装飾の活発化はもしかするとIV区の郊外別荘やIII区の「カーセ・デル・ジャルディーノ」に被害を及ぼした地震と関係するのかもしれない⁷⁵。

明らかにその変化は後3から4世紀を通じて徐々に進行しているものの、むしろ継続性への指向が強い。これらの後4世紀末のドムスは後2世紀のエリート住宅と似通った規模である。実際に古代末期のオスティア最大の住宅は後4世紀の新タイプではなく、最近V区で発見されたフラヴィウス帝時代のドムスであり、後4世紀に改築されおそらく6世紀までは使われていたようである⁷⁶。オスティアにおいては古代末期のドムスは豪華な装飾という点では後2世紀の前時代のスタイルに見事なまでに比肩しうるが、同時代のローマのドムスはほとんどが比較的地味で比較の対象とはならない⁷⁷。

末期ドムスのデザインにおけるほとんどすべての要素を後2世紀の地上階の集合住宅やペリスタイル型のドムスにすでにその存在を見ることができる⁷⁸。より大きな住宅は中央に小さな中庭がデザインされており、ヘレニズムからローマ時代の地中海沿岸の住宅と完全に同一の特徴である。とくに中庭を取り巻く各室の配置は確固たる継続性を保持しながら後2から4世紀の間に徐々に発展してきたのであり、途中での断絶は考えにくい。すでに議論した「ミューズの家」や「ジョーヴェとガニメデのインストラ」（図15）と比較してみても、ともに集合住宅用のより大きな街区の一部として後2世紀に建設されたが、「魚のドムス」（IV.iii.3）とほぼ同じ規模、「柱列のドムス」（IV.iii.1）（図17のaとb）より少し小さく、後3世紀に成立した平面が後4世紀にはさらに変化を遂げる。まず軸線上に配置されず、一つ（ときには二つ）の玄関は主たる接客室は住宅の奥側に置かれ、かわりに装飾性豊かな第二の接客エリアが玄関付近に配される。そして、ともに内部で連結された二室からなる続間のユニット（主人の間）がどちらのグループにも見られる。末期の住宅の構成要素が明らかに北アフリカの住宅建築に強く影響を受けていることはかねてから言われているが⁷⁹、すでに議論したように少なくとも後2世紀の住宅まで影響をさかのぼることもできる。もしかすると、オスティアと北アフリカのような古くから古代ローマの一部であった地域には深い商業的関わりが存在したのかもしれない。

これらの特徴を理解した上で、室配置について考えてみると、より初期の典型的な住居に見られる構造と同種のものを見いだせる。重要な要素は玄関と接客空間であり、すべての訪問者に特別な眺めを提供するためだが、招待された客は更なる景観を満喫することができるようになっている。共通する特徴は、玄関から大食事室までの間に一般的な訪問者のための接客の場が設けられ、いわば主たる観客である訪問者の動線が設定されているのである。それは家主あるいは執事が、わざと中庭を横切って豪華に装飾されている内部空間が目に入るように訪問者を立ち止まらせるといったもので、食堂にいたるためにとくに必要な動きでない。後2世紀の「ジョーヴェとガニメデのインストラ」では、玄関ではメイン・ホール of 華やかな装飾を一瞬眺めることができ、それは精巧に縁取りされた神話を描いたパネルであった。より近くでこの絵を見るためには、訪問者は晩餐会に招待されるか、主人の書斎に入っていかなければならない⁸⁰。2世紀を経て、「柱列のドムス」では中庭の噴水の平坦な裏面だけが訪問者の目にとまる。彼らは、回りこんで噴水を眺めたくても、そう簡単に奥まで入ることはできない。一方でさらに贅沢に小祠風に仕立てられた水盤に

については、晩餐会において主賓が座する場からもっともよく見えるように綿密に位置取られている（図18）。やや小規模なホール・タイプの平面計画においても共通する配慮が見られる。後4世紀末の「アモーレとプシケのドムス」（図17c）がその好例である。その華美な大理石張りの床と壮大なニンファエウムにもかかわらず、その平面は基本的にメディアヌム型の集合住宅と同じで、主たる生活空間は玄関室とその廊下に通ずる外部階段によって完全に隔離されており、まさにメディアヌム型のように、機能分けが行われていた。

同様のヒエラルキーをもつ空間構成は、装飾スタイルからみても古代末期の特徴といえるが、床や壁の大理石仕上げにおいては多様性が極端に増しており、転用品の流通が進んでいることを示している。ただし、モザイクのモチーフや構図では多くは単一的である。床仕上げを比較することも可能で、最近「ディアナの家」の下層やIII区やIV区の大規模ドムスの下層に後2世紀はじめのドムスのかたちをした集合住宅が発見されるまで、後2世紀の幾何学パターンの白黒モザイク・カーペットが集合住宅とドムス、あるいはオプス・セクティレとよばれる末期ドムスの彩色モザイクとも、はっきりとした対比をもつと一般的に考えられていた⁸¹。現在では、すでに後2世紀において、オプス・セクティレが、従来より小さな部屋用と考えられていた白黒の幾何学パターン・モザイクとともに大きな床面に使われていたことが判明している。したがって「プロティロのドムス」（V.ii.5）⁸²や「魚のドムス」、「柱列のドムス」など、多くの古代末期の住宅で確認されたパターンがこの時期の発明というよりは確実により早い時期から使われはじめていたことは間違いない⁸³。部屋によってモザイクをタイプ分けするために同様のモチーフを選択したとしても、「ディアナの家」（図5c）下層のドムスの廊下と「魚のドムス」（図16a）のそれが完全に繰り返して同じモチーフが用いられている。あるいは「柱列のドムス」（図17b）のペリスタイル北西隅の4部屋にみられる後4世紀の「矩形カーペット」と呼ばれるモザイクと、ハドリアヌス帝期の「ミューズのインストラ」（図5a）の多くのモザイクも同様である。これらの実例に見られる継続性は、「魚のドムス」のように後2世紀あるいは3世紀初期のモザイクが古代末期の住宅再編時にも繰り返して用いられたことでもかなりはっきり示されている⁸⁴。

古代末期の住宅に関わる要素には先行する高級集合住宅に先行して見られるものがある。主接客室の円柱付のエントランスは、すでにハドリアヌス帝期の「イエロドゥーレのインストラ」（III.ix.6）にも使われている⁸⁵。装飾付の大理石噴水が「ディアナの家」の下層からみつかった華美に装飾された後2世紀のドムス型集合住宅にその先例をみることもできる⁸⁶。すでにみてきたように、この中庭の大理石とモザイクで装飾された噴水は主たる接客室との関連性は古代末期の「柱列のドムス」と同質である。小祠付の噴水をもつ壁面は、「アモーレとプシケのドムス」、「ニンフェオのドムス」（III.vi.1）（図19）や「フォルトゥーナ・アンノナリアのドムス」が代表例で、古代末期に特徴的にみられる。住宅を飾る彫刻はオスティアの先行する住宅には見られない異質なものであるが、おそらく後2

世紀後半、「ジョーベとガニメデのインストラ」の庭園の祠に何気なく置かれたユピテルの彫刻のようなもので、何もない空虚な空間にするよりは、彫刻にふさわしい場所に何か置いておこうという程度の感覚である。

結局、後2世紀の地上階の大規模住宅やペリスタイル型のドムスにみられる空間や装飾の構造に通底する継続性は、大理石の普及が引き起こした変化よりは全体として協力であったといわざるを得ない。これらの古代末期住宅が集合住宅ブロックとは別にあるいは独立して建っていたとしても違いはない。比較的大規模な後4世紀のドムスの多くが、後2世紀の先行する住宅と同様に、居住スペースを獲得するために内部に上階を有するだけでなく、ともに街路やタベルナを介して上階の集合住宅へつながる外部階段を共通して構造の一部としてっており、この都市における後2世紀を決定づける商業用や居住用の空間を都市住民のために賃貸したという事実が継続していることを示しているからである。この連関はかなり遅い住宅にならないと断ち切られない。例えば「アモーレとプシケのドムス」では、外部階段が機能を失ったところに商業的な造作を加えている。装飾や泉水庭園などの設えの変化よりも、これら末期ドムスにだけ見られる新しい特徴は住宅内において一つあるは二つの主室に床暖房が導入された点である。この贅沢がオスティア社会の上位階層に浸透したという見方をすれば、むしろ既存の居住パターンの変化があまりにもゆっくりであったため、古代末期の裕福なドムスに生じた、このような見た目に明らかな「新しい」現象が、我々が考えるよりも決して急進的とはならなかったことを示している。聖アウグスティヌスが彼の母を失った後387年に滞在していた庭園付のドムス⁸⁷はおそらく2世紀以上前に彼を訪ねた多くの北アフリカ人が暮らした家々とほとんど違いはなかったであろう。

オスティアは、パヴォリーニが記すように⁸⁸、都市の経済的活動に多くの負債を抱え込むことになった後3世紀後半の地震のあと現実的かつ経済的な困難に直面したが、そうした社会状況のもとで、下層の居住・商業用インストラは変質、適応し後4世紀まで存続しており⁸⁹、やはり下層住民や小規模の小売、製造業は生き残っていた。都市の北側ではティベリス川に沿って「ジョーベとガニメデのインストラ」の地上部分を押し込んだような住居が建ち、そこでは階段室の伝統もそのままに上階も居住用として供されたが、あくまでも社会的には最下層民のための住居と考えられる(図20)⁹⁰。我々は未だ装飾の少ない庶民住宅の末期の様相を知ることができないが、その理由の一つに1920から30年代の発掘においてこれらを示す遺物のほとんどが葬り去られてしまったことがある。当時の発掘者の関心事は帝国ローマの発掘であり、ドイツによる地下探査によって、第4区の郊外別荘地区で後3世紀末にすでにはじまっていた変化、すなわちドムスやインストラに似た構造体の上に建設された単純な構造体のすがたをとらえはじめている⁹¹。インストラの崩壊あるいは計画された解体とタタキ土の床の丸太小屋の工事があちこちで進んでいたのが後4

世紀末から5, 6世紀のオスティアのすがたである。この領域についてはより詳しい調査を待たなければならない。

5 . 結論

この短い論文では後1世紀から古代末期までオスティアに集積された住居がみせる複雑な発展と無限ともいえる多様性についてアウトラインを説明してきた。遺構の状況を眺めてみても帝政中期の色合いが強く、非常にまれであるが共和制期の痕跡も確認できる。実は帝政期の都市の下に眠る構造体や古代末期の高級住宅については、限定的な発掘（あるいは発掘報告）とくに後者についてはとても限られた情報しかないのが現状である。

けれども、この広範な概観でも驚くべき強さの継続性、少なくとも繰り返される同一のパターンが示された。まず、後1世紀の半ばからはじまり、後4世紀あるいはそれ以降も続くハイ・ステイタスとよべる範疇に入る住宅を見いだした。帝政中期にはその形式に多様性が見られるものの、平面は違えども、規模、装飾の点では、成り立ちも人口も異なるポンペイの最高級のドムスと比較可能であった。現存している建物にみられる正面玄関、大きな接客室、そして装飾が示すヒエラルキーへのこだわりは、住宅の最奥に画された中心部への立ち入りを許された訪問者だけが堪能することができる特権でもあり、これを含めて日々の挨拶から浪費的なディナー・パーティまで共同体の最上流階級を占める最も裕福な、そして特権階級の人々のあいだの社会的慣習は強い持続性を示すものである。同時に、地上階、上階にかかわらず大規模な集合住宅は、帝国のいずこからやってきた商人や船乗りの一時的な滞在場所として発展し、彼らを庇護したクリエンテスの多くはオスティアではなくどこか別の拠点となる都市にいたであろうから、彼らがオスティアに求めた都市的なサービスは定住者に比べて限定されたはずである。

他に強い継続性を示すのはインストラだけでなく、多くのドムスでも確認される居住空間と商業空間の近接性である。上階につながる外部階段は被公共建造物のほとんどすべてに遍在し、確認できるだけでも、巨大で贅沢な集合住宅から質素な二から四室構成の住居、あるいはリビングを共有する小室構成など、非常に豊かな多様性を示しており、このことは定住者だけでなく、季節労働、あるいは移動民など多様な住み手の居場所を供給していたはずである。オスティアの都市景観を形成するタベルナ群さへも潜在的に内部に居住スペースを有したと考えてよく、これらの多くが小規模集合住宅から裕福なドムスまで本来的に居住ユニットとして使われた部分と同様に欠かせない居住空間であったことも記しておかなければならない。外部階段が必ずしも上階の集合住宅の存在を確約するものではないし、居住用としても機能するようタベルナの建設が決して帝政中期だけの現象でもないが、同様の構成が後4世紀の裕福なドムスにも見られることも事実である。コンスタンティノーブルへの中枢の移動にともなって、衰退するローマを避けるように、やがてキリスト教徒のエリート達がオスティアの住宅を海浜住宅へと再編したかもしれない。しかし

少なくとも後4世紀の末まではオスティアは十分に貿易，商業都市としての特徴をとどめており，まだ所有者階級が賃貸物件として運用しつづける価値を有していたのである。

図1，オスティア，「ジョーベとガニメデのインストラ」，ディアナ通りからのみた正面（写真筆者）

図2，オスティア，フラヴィウス帝時代のドムスの図解（ Scavi di Ostia I, fig.30 および Martin et al., “Urbanistic project”, figs. 8 and 10 を参考に作成）

図3，オスティア，「共和制期のカセット」発掘時の実測図（オスティア遺跡監督所より提供）

図4，オスティア，地下探査によって確認された「上流階級の住宅」， a) V区のドムス， b) IV 区の郊外別荘（ Martin et al., “Urbanistic project”, figs. 8 and 10 を参考に作成）

図5，オスティア，上流階級のドムスーインストラ， a) 「ミューズのインストラ」， b) 「ジョーベとガニメデのインストラ」 c) 「ディアナの家」の下層のドムス，（aは Becatti, Mosaici, Tav. CCXXVより， bは筆者作成， cは Marinucci, “Maison de Dianne”, fig.7より）

図6，オスティア，「ジョーベとガニメデのインストラ」，カピトリウム背後の道路から見た広い玄関口から玄関廊へのながめ（筆者撮影）

図7，オスティア，「ディアナの家」，大理石とモザイクの噴水（筆者撮影）

図8，オスティア，「バッコ・ファンチウッロのインストラ」，平面（筆者作成）

図9，オスティア，「V.iiiのインストラ」図解（筆者作成）

図10，オスティア，「カセット・ティーポ」図解（筆者作成）

図11，オスティア，「カーセ・ア・ジャルディーノ」平面（ Cervi, “Evoluzione“, fig.1より）

図12，オスティア，「描かれたヴォールトのインストラ」， a) 地上階， b) 二階（ Becatti, Mosaici, Tav. CCXXII および Packer, Insulae, Fig.21より）

図13，オスティア，アウリーギ通りのタベルナ，奥に「カーセ・ア・ジャルディーノ」が見える（筆者撮影）

図14，オスティア，「 I.viii.6-10 のインストラ」，小規模の商業／居住空間（ Scavi di Ostia Iの 1:500 平面図より）

図15, オスティア, 「ディアナの家」, a) 地上階, b) 二階 (Packer, *Insulae*, fig.2,3 より筆者作成)

図16, オスティア, 小規模集合住宅 (III.xvi.5; III.xvi.2; I.xiv.9: III.xi.1) (筆者作成)

図17, オスティア, 末期住宅, a) 「魚のドムス」, b) 「柱列のドムス」, c) 「アモーレとプシケのドムス」 (Becatti, *Mosaici*, Tav. CCXXVII, CCXXVI, CCXXI より筆者作成)

図18, オスティア, 「柱列のドムス」主接客室Aから噴水のながめ (筆者撮影)

図19, オスティア, 「ニンフェオのドムス」, 噴水 (筆者撮影)

図20, オスティア, 「ジョーベとガニメデのインストラ」, 一階が土で埋まった後に二階に付加された壁 (G.Calza, “Gli Scavi recenti nell’abitato di Osita”, *Monumenti Antichi*. “Gli scavi recenti nell’abitato di Osita” より)

注

1. オスティアにあるすべての建物はより簡単に同定するために標準イタリア語の名前と住所を与え, *Scavi di Ostia I* においてオスティアの1:500平面図上に両方を載せている。 *Topografia generale* (ed G.Calza; Rome: Libreria dello Stato, 1953), そして標準考古学手引書 (C.Pavolini, *Ostia*[2^{ed} ed.; Rome-Bari: Gius. Laterza & Figli, 2006]) の中で。この論文はオスティアの都市発展に関しての長い期間にわたる研究の一部であり, Soprintendenza Archeologica di Ostia , 特に Anna Gallina Zevi と Jane Shepherd の信頼できる寛容なサポートを伴い進められ, アーツ・ヒューマニティーズ研究評議会とローマのブリティッシュ・スクール, オックスフォード大学からの助成金から資金を得た。不可欠で, また価値のある討議について Stella Falzone, Michael Heinzelmann, Axel Gering, Nayla Muntasser, そして私の以前の学部生たち Peter Rose, Saskia Stevens と Hannna Stoeger に感謝します。
2. 例えば G.Calza, "La preminenza dell'Insula' nella edilizia romana," *Monumenti Antichi* 23(1914):541-608, そして "Contributi alla storia della edilizia imperiale romana. Le case ostiensi a cortile porticato," *Palladio* 5(1941):1-33.
3. V. Kockel, “Il 'palazzo per tutti'. La decouverte des immeubles de location antiques et son influence sur l'architecture de la Rome fasciste,” in *Ostie – port et porte de*

- la Rome antique* (ed. J.-P. Descoedres; Genève: Musées d'art et d'histoire, 2001), 66–73, そして cf. G. Calza, “Le origine latine dell'abitazione moderna (I),” また I. Gismondi, “Le origine latine dell'abitazione moderna (II),” in *Architettura e Arti Decorative* (1923): 3–18 と 49–63.
4. G. Becatti, “Case ostiensi del tardo impero,” *Bollettino d'Archeologia* 33 (1948): 102–128, 197–224.
 5. ブクラニのドムスハウスの 1997 年からの発掘に関して, *Schola del Traiano* (IV.v.15) の中で, B. Perrier 参照, “Les trois edifices successifs: Schola du Trajan, Domus à Peristyle, Domus aux Bucranes,” in *Villas, maisons, sanctuaires et tombeaux tardo-republicains* (eds A. Gallina Zevi and B. Perrier; Rome: Quasar, 2007) 15–32.
 6. *Scavi di Ostia I*, 103, 107–11, 図 29.
 7. M. Heinzelmann M., S.T.A.M. Mols, M. McKinnon, “Ostia, Regionen III und IV. Untersuchungen in den unausgegrabenen Bereichen des Stadtgebietes. Vorbericht zur vierten Grabungskampagne 2001,” *Römische Mitteilungen* 109 (2002): 225–242; A. Martin, M. Heinzelmann, E.C. De Sena, そして M.G. Granino CeCere, “The Urbanistic Project on the Previously Unexcavated Areas of Ostia (DAI–AAR 1996–2001),” *Memoirs of the American Academy in Rome* 47 (2002): 265–269.
 8. R. Meiggs, *Roman Ostia* (2nd ed., Oxford: OUP, 1973) 13–14.
 9. Domus di Giove Fulminatore (IV.iv.3); Domus della Nicchia a Mosaico (IV.iv.3).
 - 10.

注 6 参照 .*Scavi di Ostia I* の中で最初期の諸段階のいくつかは紀元前 2 世紀後半と年代を定められたにも関わらず, これは大部分が建設技術の文体上の日付に依るものであり, それら自体, ローマから, そしてより重要なものはオスティア自身からの類似物に基づいた. 今や後期共和政時代の諸城壁の年代決定は説得力をもって紀元前 80 年代から紀元前 60 年代後半に変わった (F. Zevi, “Costruttori eccellenti per le mura di Ostia. Cicerone, Clodio e l'iscrizione della Porta Romana,” *Rivista Istituto Archeologia e Storia dell'Arte* 19–20 (1997): 61–112.), これら諸年代のいくつかは修

正の必要がある。 *Domus dei Bucrani* の第一段階は考古学的根拠から約紀元前 60 年と年代決定されてきた (S. Aubry, “La datation des phases de construction et de destruction de la Domus aux Bucranes: céramiques et monnaies,” in *Villas, maisons, sanctuaires et tombeaux tardo-republicains* [eds A. Gallina Zevi and B. Perrier; Rome: Quasar, 2007]) 46–47.

11.

Meiggs, *Roman Ostia*, 238.

12.

床に関して Becatti 参照, *Scavi di Ostia IV. Mosaici e pavimenti marmorei* (Rome: Libreria dello Stato, 1961) 19–21, と Tav. IV–V, LXXIII. I.ix.1 の中の 3 つの家で今もある諸区域は約 240 から 300 m² の範囲に及ぶ。並べてみるとポンペイの家々を例にした Wallace-Hadrill の研究の第三四分位 (A. Wallace-Hadrill, *Houses and society in Pompeii and Herculaneum* (Princeton: Princeton University Press, 1994), 79–82), ポンペイの典型的なアトリウムのある家々の多くがそれにあたるのだが, 四分位が 350 から 3000 m² 以上にあたるのに対してそれは 175 から 350 m² の範囲に及ぶ。

13.

Pavolini, *Ostia*, 99–100.

14.

実際, オスティアの多くの例が Wallace-Hadrill の四分位の大部分においてポンペイの諸住宅と同じであり, ドムスハウスをぜいたくに装飾した (注 12 参照)。

15.

S. Lorenzatti 参照, “La domus di Giove fulminatore,” *Bolletino di Archeologia* 49–50 (1998): 79–98, 主にその住宅のより後の側面に関して。

16.

T. Morard 参照, “Le plan de la Domus aux Bucranes et son système décoratif: pavements – parois peintes – stucs – plafonds,” in *Villas, maisons, sanctuaires et tombeaux tardorepublicains* (eds A. Gallina Zevi and B. Perrier; Rome: Quasar, 2007) 55–80, そして cf. S. Falzone, *Ornata Aedificia. Pitture parietali dalle case ostiensi* (Roma: Libreria dello Stato, 2007), 33–38.

17.

最も最近の共和政期のオスティアに関する報告は F. Zevi 参照, “Appunti per una storia di Ostia repubblicana,” *MEFRA* 114 (2002): 13–58, especially 55–56.

18.

C. De Ruyt, “Un exemple de discontinuité des fonctions monumentales dans un quartier de la ville romaine d'Ostie (Reg. III, Ins. II),” *Revue belge d'archéologie et d'histoire de l'art* 65 (1996): 5–16.

19.

J.S. Boersma, Th.L. Heres, H.A.G. Brijder, J.J. Feye, M. Gnade and S.L. Wynia, *Amoenissima Civitas. Block V.ii at Ostia: Description and Analysis of Its Visible Remains* (Assen: Van Gorcum, 1985), 156, 198.

20.

Martin et al., “Urbanistic project,” 265–69; Heinzelmann et al., “Ostia. Regionen III und IV”, 233–39; F.A. Bauer, M. Heinzelmann, A. Martin, “Ostia. Ein urbanistisches Forschungsprojekt in den unausgegrabenen Bereichen des Stadtgebietes. Vorbericht zur 2. Grabungskampagne 1999,” *RM* 107 (2000): 394–410.

21.

A. Claridge, “The villas of the Laurentine Shore,” *Rendiconti della Pontificia Accademia romana di archeologia* 70 (1998): 307–317.

22.

Lorenzatti, “Giove fulminatore,” especially 94.

23.

F. Coarelli, “Apuleio a Ostia?” *Dialoghi d'Archeologia* 7 (1989): 27–42.

24.

Perrier, “Trois edifices,” 15, 20 note 12.

25.

Ch.Bocherens と F. Zevi, “La schola du Trajan et la domus du consul Caius Fabius

Agrippinus a Ostie,” *Archeologia Classica* 58 (2007): 257–271. Fabius Agrippianus は C. Fabius Agrippa , 帝国初期の二人委員でその家の推定上の持ち主, の子孫 (生まれながらかもしくは養子) かもしれないという彼らの推論は魅力的だが証明できない.

26.

Meiggs, *Roman Ostia*, 503–4; F. Zevi, “Nuovi documenti epigrafici sugli Egrilii Ostiensi,” *Mélanges de l’École Française de Rome: Antiquité* 82 (1970): 279–320.

27.

J. DeLaine 参照, “The Insula of the Paintings at Ostia 1.4.2–4. Paradigm for a city in flux,” in *Urban Society in Roman Italy* (eds T.J. Cornell and K. Lomas; London: UCL Press, 1995), 84–7, and J. DeLaine, “High status *insula* apartments in early imperial Ostia – a reading,” *Mededelingen van het Nederlands Instituut te Rome, Antiquity* 58 (1999): 175–187 for detailed discussion of the *Insula di Giove e Ganimede*, and some comments on the *Insula delle Muse*.

28.

A. Marinucci, “La Maison de Diane (I iii 3–4),” in *Ostie – port et porte de la Rome antique* (ed. J.-P. Descoedres; Genève: Musées d’art et d’histoire, 2001), 230–44.

29.

前述注 12 参照. タベルナを併設した *Casa di Diana* は 880 m²を占めるが, これらが占めるどの区域もかつて本来の家の一部であったかどうかははっきりしていない.

30.

この街や市場のまさにその意義は再建しにくいけれども, III.ii.6で小さなトラヤヌスの貯蔵庫 / 市場への正式な入り口, れんがの柱とペディメントで特徴づけられたのだが, それがこの街に正確に並べられたという事実は *Insula delle Muse* と *Case a Giardino* の解釈の前でさえもその重要性を示唆している.

31.

これらの部屋について一般に G. Hermansen, *Ostia. Aspects of Roman City Life* (Edmonton: University of Alberta Press, 1982), 17–33, そして DeLaine の

“Paradigm”における議論を参照．

32.

諸床については Becatti の *Mosaici*, 128–33 と Tav. CCXXV を , 壁画に関する初期の刊行物については B.M. Felletti Maj と P. Moreno, *Le pitture della Casa delle Muse, Monumenti della pittura antica scoperti in Italia III, Ostia 3* (Rome: Poligrafico dello Stato, 1967) , 簡単な分析について Falzone *Ornata*, 56–68 と共に参照．

33.

モザイクについて Becatti, *Mosaici*, 14–16 , そしてより後の画法については S. Falzone, *Scavi di Ostia XIV. Le pitture delle Insulae* (Rome: Libreria dello Stato, 2004) 61–82.

34.

彼の諸解釈には問題がないということはないが、詳細については Marinucci, “Maison de Diane” を参照．西部回廊のモザイクはより後の *Casa di Diana* の一部を形成しているタベルナの東側の壁の下にあるように見え、それはその家は元々西側にも複数の部屋があったことを示唆したのだろう．

35.

cf. M. De Franceschini, *Villa Adriana : mosaici, pavimenti, edifici* (Rome: “L’Erma” di Bretschneider, 1991).

36.

cf. J. DeLaine, “Designing for a market: ‘medianum’ apartments at Ostia,” *Journal of Roman Archaeology* 17 (2004): 170–1.

37.

M. Cebeillac-Gervasoni, “Gli ‘Africani’ ad Ostia ovvero ‘Le Mani sulla citta’ ,” in *L’Incidenza dell’Antico* 参照．オステティアでのアフリカ人については *Studi in memoria di E. Lepore* (eds A. Storchi Marino, L. Breglia Pulci Doria, C. Montepaone; Naple: Luciano, 1996), 3, 557–567 参照．

38.

本来の二世紀半ばという年代決定については G. Calza, “Ancora sulla Basilica

Cristiana,” *Rendiconti della Pontificia Accademia* 18 (1941–42): 136 , そしてトラヤヌスの時代については Th.L. Heres, “Alcuni appunti sulla Basilica Cristiana (III.I.4) di Ostia Antica,” *Mededelingen van het Nederlands Instituut te Rome, Antiquity* 42 (1980): 94–95 を参照 .

39.

最も最近の S. Falzone, *Le pitture delle Insulae (180–250 circa d.C.). Scavi di Ostia* 14 (Rome: Libreria dello Stato, 2004) 119–26 参照 .

40.

C. Gasparri *Le pitture della Caupona del Pavone, Monumenti della Pittura Antica* III,4 (Rome: Poligrafico dello Stato, 1970), 7–14.

41.

注 12 参照 .

42.

これらの多くの諸描写について , J.E. Packer, “The Insulae of Imperial Ostia,” *Memoirs of the American Academy in Rome* 31 (1971) 参照 , そして諸統計について A. Gering, “Habiter a Ostie: la fonction et l'histoire de l'espace 'privé',” in *Ostie – port et porte de la Rome antique* (ed. J.-P. Descoedres; Geneva: Musées d’art et d’histoire, 2001), 202 参照 .

43.

Hermansen, *Ostia*, 24–53.

44.

DeLaine, “Medianum,” 148–9.

45.

S. Priester, *Ad summas tegulas. Untersuchungen zu vielgeschossigen Gebäudeblöcken mit Wohneinheiten und Insulae im kaiserzeitlichen Rom* (Rome: L'Erma di Bretschneider, 2002), 77–86, Taf. 78.

46.

A. Gering, “Medianum-apartments”: Konzepte von Wohnen in der insula im 2. Jh. n.Chr.,” *Mededelingen van het Nederlands Instituut te Rome, Antiquity* 58 (1999): 109–11.

47.

諸床については Becatti, *Mosaici*, 138–139 を参照 .

48.

F. Pirson, “Rented accommodation at Pompeii: the evidence of the Insula Arriana Polliana V.i.6,” *Domestic Space in the Roman World*の中で : *Pompeii and Beyond* (eds. R. Laurence and A. Wallace-Hadrill; Portsmouth: *Journal of Roman Archaeology* Supplement 22, 1997), 165–181.

49.

Cf. Packer, *Insulae*, 8–9.

50.

ポンペイで Casa di Giuseppe II (VII.ii.39) のより低い床を形成している一揃いの部屋は平面図においては medianum に近く , 1 世紀半ばからの進化を示唆している . L. Richardson, *Pompeii. An architectural History* (Baltimore: 1988), 238–39 参照 .

51.

R. Cervi による役に立つ研究 , “Evoluzione architettonica delle cosiddette `case a giardino` ad Ostia,” in *Città e monumenti nell'Italia antica. Atlante tematico di topografia antica* 7(eds. L. Quilici and S. Quilici Gigli; Rome: L'Erma di Bretschneider, 1999), 141–156 を参照 , そして 発達段階については A. Gering, “Die Case a Giardino als unerfüllter Architektentraum. Planung und gewandelte Nutzung einer Luxuswohnanlage im antiken Ostia,” *Römische Mitteilungen* 109 (2002): 109–140 を参照 .

52.

上の階にある便所については S. Stevens, “Reconstructing the Garden Houses at Ostia. Exploring Water Supply and Building Height,” *BABesch* 80 (2005): 113–123 を参照 .

53.

J. DeLaine, “Building activity in Ostia in the second century AD,” in *Ostia e Portus nelle loro relazioni con Roma, Acta Instituti Romani Finlandiae 27* (eds C. Bruun and A. Gallina Zevi; Rome: Institutum Romanum Finlandiae, 2002), 73–4.

54.

DeLaine, “Medianum”.

55.

これらの諸玄関については H. Stoeger, “Monumental Entrances of Roman Ostia. Architecture with Public Associations and Spatial Meaning,” *BABesch* 82 (2007): 347–363 を参照 .

56.

Packer, “Insulae,” 11–12, 170–1. これらの考えは T. Kleberg, *Hôtels, restaurants et cabarets dans l'antiquité romaine* (Uppsala: Almqvist & Wiksells, 1957), 46 まで遡る .

57.

Stevens, “Reconstructing”.

58.

一般的に J. DeLaine, “The commercial landscape of Ostia,” in *Roman Working Lives and Urban Living* (eds A. MacMahon and J. Price; Oxford: Oxbow 2005), 29–47 を参照 .

59.

タベルナの発掘についての標準的な報告について G. Girri, *La taberna nel quadro urbanistico e sociale di Ostia* (Roma: "L'Erma" di Bretschneider, 1956) を参照 , そして M. Heinzelmann, “Bauboom und urbanistische Defizite – zur städtebaulichen Entwicklung Ostias im 2. Jh.,” *Ostia e Portus nelle loro relazioni con Roma, Acta Instituti Romani Finlandiae 27* (eds C. Bruun and A. Gallina Zevi; Rome: Institutum Romanum Finlandiae, 2002), 108–112, と特に Tafel IV.2 は準備に関して地球物理学的調査の結果生じている . 未発表の詳細な平面図はさらに多くあったことを示唆している . Michael Heinzelmann に発表前にこの平面図を手に入れたことを

感謝する .

60.

*medianum*アパートのヘルマンセンのリストの中に含まれる (Hermansen, *Ostia*, 47-8).

61.

最も最近の Priester, *Ad summas tegulas*, 67-77, Taf. 71 を参照 .

62.

貸し宿泊施設の広く知られる諸議論が B.W. Frier, “The Rental Market in Early Imperial Rome,” *Journal of Roman Studies* 67 (1977): 27-37 と , *Landlords and Tenants in Imperial Rome* (Princeton: Princeton University Press, 1980) であり , 法的根拠に言及している .

63.

Gering, “Medianum apartments,” and “Habiter,” 202-7.

64.

Gering, “Medianum apartments,” 104 は複数の部屋と個人専用の 1.3m かそれ以下の閉じることのできる玄関口との間の , またより大きな部屋と共同使用 , このようにリビングスペースを共有したシングルから邸宅のリビングや受付の部屋にまでわたっている , そのより広い玄関口との間のオスティアの証拠を統計学的に行った分析に基づいて有用な区別がされている .

65.

Gering, “Habiter a Ostie” and “Medianum-apartments”.

66.

Becatti, “Case ostiensi”.

67.

B. Brenk と P. Pensabene, “Christliche Basilika oder christliche 'Domus der Tigriniani'?” *Boreas* 21-22 (1998-99): 271-299; A. Gobbi, “Nuove osservazioni sulle fasi costruttive della c.d. Basilica Cristiana di Ostia Antica,” *Rivista di Archeologia Cristiana* 74.2 (1998): 455-80, 二つの後期古代の段階に賛成している .

68.

F. Guidobaldi, “Una *domus* tardoantica inedita di Ostia ed i suoi pavimenti,” *Atti del II Colloquio dell'Associazione Italiana per lo Studio e la Conservazione del Mosaico. Roma 1994* (Bordighera: Istituto Internazionale di Studi Liguri, 1995), 525–40.

69.

M.L. Laird, “Reconsidering the So-called ‘Sede degli Augustali’ at Ostia,” *Memoirs of the American Academy in Rome* 45 (2000): 41–84.

70.

石灰焼きかまどについてもまた P. Lenzi, “‘Sita in loco qui vocatur calcaria’: attivita di spoliazione e forni da calca a Ostia,” *Archeologia Medievale* 25 (1998): 251, 注 23 参照 . Cristina Murer のこれらが後期古代の家に属したという提言に感謝します .

71.

B. Bollmann, “Les collèges religieux et professionnels romains et leurs lieux de réunion a Ostie,” in *Ostie – port et porte de la Rome antique* (ed. J.-P. Descoedres; Geneva: Musées d’art et d’histoire, 2001), 176.

72.

A. Sakaguchi, “Schola del Traiano: the Seat of the Shipbuilders' Association,” in *Report of the Investigation of Ostia Antica in 2009. Japanese Research Group of Ostia Antica*, 1–10 (Internal publication, 2010), は説得力をもって造船技師たちに一般に受け入れられる接合はどれほどの薄さかを実証する .

73.

年代決定の要約に関して Perrier, “Trois edifices,” 20 は 12 を述べる . 完全な議論は後に登場する .

74.

C. Pavolini, “L’edilizia commerciale e l’edilizia abitativa nel contesto di Ostia tardoantica,” in *Società romana e impero tardoantico II* (ed. A. Giardina; Rome-Bari: Laterza, 1986), 255–69.

75.

Heinzelmann et al., “Ostia. Regionen III und IV,” 233–39; Gering, “Case a Giardino,” 特に 322 , 注 6 , 西暦 275 年の地震を示唆している .

76.

Bauer et al., “Urbanistisches Forschungsprojekt,” 394–410.

77.

cf. F. Guidobaldi, “L’edilizia abitativa unifamiliare nella Roma tardoantica,” in *Società romana e impero tardoantico II* (ed. A. Giardina; Rome-Bari: Laterza, 1986), 165–237.

78.

後期ドムスハウスの形式的側面に関する最近の見直しについて R. Tione, “Nuove soluzioni funzionali nelle domus tardoantiche di Ostia attraverso la lettura delle tecniche edilizie e delle tipologie architettoniche,” *AEsp* 77 (2004): 221–238 を参照 .

79.

Becatti (“Case ostiensi,” 49–50) は装飾に基づいた接合、特に *Domus dei Dioscuri* について最初に示唆した .

80.

DeLaine, “High status housing,” 180–84.

81.

議論された諸床のほとんどは G. Becatti, *Scavi di Ostia IV. Mosaici e pavimenti marmorei* (Rome: Poligrafico dello Stato, 1961) 参照 , そして *Casa di Diana* の下のドムスハウスについては Marinucci, “Maison de Diane” を参照 .

82.

Boersma et al., *Amoenissima*, 図 87.

83.

コロンヌのドムスとペシのドムスの諸床に関して
30

Becatti, *Mosaici*, 179–183, Tav.

CCXXVI and CCXXVII を参照 .

84.

より初期のモザイクについて Becatti, *Mosaici*, 181–2, nn. 335–336, tavv. CIC, CCXXVII を参照、そして諸段階の年代決定については F. Zevi, R. Geremia, A. Leone, と L. Moreschini, “Ostia: sondaggio stratigrafico in uno degli ambienti della domus dei Pesci (1995–1996),” *Notizie degli scavi di antichità*, 15–16 (2004–2005) [2007]: 27–29 を参照 .

85.

S. Falzone, A. Pellegrino, E. Broillet, “Les peintures de la Maison des Hiérodoules,” in *Ostie – port et porte de la Rome antique* (ed. J.-P. Descoedres; Geneva: Musées d’art et d’histoire, 2001), 346–47.

86.

Marinucci, “Maison de Diane”, 234–236.

87.

Augustine, *Confessions*, 9.10.23.

88.

Pavolini, “L’edilizia,” 249–52.

89.

P. Rose, *A systematic study of the urban landscape of Ostia in the 3rd c AD* (unpublished PhD thesis, University of Reading, 2005).

90.

DeLaine, “Insula of the Paintings,” 94–99, 図 5.10.

91.

Martin, “Urbanistic project,” 263–269.

(堀賀貴訳)